

被爆地ヒロシマとは何か？



プレスコードが解禁された翌年の1953年、日教組で制作された映画「ひろしま」。被爆者含む広島市民約9万人が手弁当でエキストラ参加した。

<はじめに>

今年は被爆73年目の8月6日を迎える年です。被爆地「ヒロシマ」は今や世界的な言葉となっています。カタカナでヒロシマと書くのは、土地としての広島と区別し、被爆地としての広島、世界に語り継ぐべき原爆・戦争の許し難さを語るためです。

原爆の威力を中心に、その恐ろしさを説明し、語る資料・証言は数多あります。しかし、それは人間を中心にして語られる「人間の物語」ではなく「原爆の物語」です。今回強調したいのは「人間の物語」です。

故中沢啓治氏著『はだしのゲン』でももちろん、原爆の威力・その直接的恐ろしさが描かれていますが、物語の中心はそれ以上に原爆・戦争のもたらした人間社会の深い傷と、その中で生き抜く人々の強さでした。

今回は1945年原爆投下からの8月6日という日のあり方の変化を中心に見ながら、ヒロシマの「人間の物語」を示していきたいと思います。

<ヒバクシャ>

原爆投下では、広島市に当時いた35万人のうち14万人が1945年中に死亡、1950年までには20万人が亡くなりました。強力な熱線・爆風だけでなく放射能（原爆投下で放たれた放射線に加え、放射性物質を吸い込んだことによる内部被ばくの影響もあると考えられている）によって殺されたということです。原爆投下直後に近くにいた人だけでなく、その後に軍隊や医師として広島市に入って

投下地点近くで作業した人も被曝し、多くが放射線の影響とみられる症状で亡くなりました（入市被曝）。

“ヒバクシャ”はそうした中、家族や友人を殺されながら生き抜いてきた人たち（サバイバー）のことです。

原爆は生き残った者にケロイド（火傷の跡が盛り上がって残る）や身体の痛みなどの原爆症を残しました。「原爆ぶらぶら病」と言われる、当時の診療では異常なしとされながらも、抵抗力が低下し身体がだるい状態が続く症状もありました。

原爆を生き抜いたヒバクシャを襲ったのは、差別でした。当時ケロイドはうつると考えられ「ピカの毒がうつる」と、銭湯での入浴を断られたなどの話が複数あります。原爆ぶらぶら病で「怠け者」とされて解雇された、「被爆した嫁はいらん」と結婚できなかった話など、典型的な就労差別・結婚差別は強力にあったようです。なので、自己負担なしに医療・介護を受けられるようになる被爆者健康手帳が発行されても、被爆者とバレて差別されることを恐れ、ヒバクシャとして告白してこなかったという人も少なくありません。親しい人との死別、原爆症と死の恐怖、そして差別。ヒバクシャの味わった地獄は、原爆投下のその日だけではなかった。それでも生きて生き抜いてきたのがヒバクシャです。



<プレスコード>

—東京新聞コラム：筆洗（2013年8月6日）より—

♪ピカッと光った原子のたまにヨイヤサー、飛んで上って平和の鳩よ…。一九四七年八月六日、つまり人類初の原子爆弾投下から丸二年たった日、広島市中心部では「平和音頭」にあわせて人々が通りを練り歩いたそうだ▼戦争体験がどう語られてきたかを検証した『焦土の記憶』（福間良明著、新曜社）によると、四六年八月六日の地元紙一面には「けふぞ巡り来ぬ平和の閃光（せんこう）」「広島市の爆撃こそ原子時代の誕生日」との見出しが掲げられた▼八月六日がまるで「祝祭」のような色を帯びていた背景には、連合国軍総司令部（GHQ）の情報統制がある。人々と街を焼き尽くした原爆は、戦争を早期終結させた「平和の閃光」とされたのだ▼広島に原爆が投下された三日後に現地入りした弊社の先輩記者に、話を聞いたことがある。原爆ドームの写真は一応撮ったが、目に入る被爆者にはレンズを向けもしなかったという▼「どうせ検閲で載せられない。そんなものを撮るため貴重なフィルムを無駄には使えない」。戦時中の情報統制下にあった記者には、そういう自己規制の心理が働いていたのだ▼権力者が情報を統制し、報道に関わる者が力に巻き取られれば、どんな大惨劇でも真相は隠されて、あたかもそれが「祝うべきこと」のようにすら伝えられる。八月六日は、そんなことを、改めて考えさせる日でもある。



図1 1947年8月6日の広島平和祭



1946年8月6日の中国新聞。「けふぞ巡り来ぬ平和の閃光」とある。

驚くべきことに、原爆投下から数年間、ヒバクシャの存在は隠され、原爆を「平和の閃光」として祝福することまで行われていました。この情報統制（プレスコード）は52年まで続きます。1948年によりやく「ノーモアヒロシマ」が掲げられましたが、それは主に「アメリカに歯向かうな」という文脈で可能になったことでした。49年によりやくヒバクシャの声が中国新聞に載ります。「毎年原爆の日に本当に物足りなく思

いますのは、私たち原爆のため傷を受け、ちょっとでもあのおそろしい日を忘れ得ぬ者にとって何一つ慰めるものがないことです。…例年のお祭り騒ぎが出来るのは本当に第三者ばかりのように思います。…」と。プレスコード下でも無視できないほど、ヒバクシャの思いが高まっていたということでしょう。

プレスコードで「いないもの」として扱われながらも、生きるために必死に叫び続けていたヒバクシャの格闘がありました。

<反戦反核を訴えるヒロシマのはじまり>

自分たちのような存在を二度と繰り返してはいけないと、ヒバクシャが先頭で立ち上がったのが1950年朝鮮戦争下の8月6日でした。当時の米大統領トルーマンは朝鮮戦争に「平和のために原爆使用も辞さず」と訴えていました。これまでのお祭り騒ぎの平和祭も含め8月6日の行事すべてが禁止。朝鮮戦争に向け、全国でもレッド・パージで共産主義者と見なされた人々が職場を追われるなか、広島市警察本部は、「反占領軍的または非日的と認められる集会、集団行進、あるいは集団示威運動を禁止する方針を決定」し、8月5日、全市に「平和祭に名を借りる不穏行動に乗るな—知らずして犯罪に問われるな」というビラを配りました。

集会・デモは全面禁止され占領軍と警察がひしめく中、ヒバクシャたちは広島市中心、福屋デパート前で朝鮮戦争反対を訴える集会を開き、「原爆使用政府は戦争犯罪人として断罪されるべき」という内容の国際署名（ストックホルム・アピール署名）を呼び掛けました。こうした国際的な運動があつて、朝鮮戦争で核が使えなかったと当時の国務長官は回顧録に書いています。

またこの8月には広島生も決起。反米ビラを配布したとして広島生7人が無期停学の処分を受けています。

弾圧を恐れず立ち上がった運動によって核戦争としての朝鮮戦争は阻止され、52年のプレスコード解除があつてヒバクシャの存在が全世界に知れ渡るなか、その後1955年ビキニ水爆による内部被曝反対の運動の盛り上がり結びつき、ヒバクシャの存在は全世界的なものとなりました。

「1950年の8月6日」 峠三吉（『原爆詩集』より）

走りよってくる 走りよってくる
あちらからも こちらからも
腰の拳銃を押えた 警官が 馳けよってくる

1950年の8月6日 平和式典が禁止され
夜の町角 暁の橋畔に 立哨の警官がうごめいて
今日を迎えた広島の 街の真中 八丁堀交叉点 Fデパートのそのかげ

供養塔に焼跡に 花を供えて来た市民たちの流れが 忽ち渦巻き
汗にひきつった顎紐が 群衆の中になだれこむ、
黒い陣列に割られながら よろめいて

一斉に見上るデパートの 五階の窓 六階の窓から
ひらひら ひらひら
夏雲をバックに 蔭になり 陽に光り 無数のビラが舞い
あお向けた顔の上 のぼした手のなか
飢えた心の底に ゆっくりと散りこむ

誰かがひろった、腕が叩き落した、
手が空中でつかんだ、眼が読んだ、
労働者、商人、学生、娘 近郷近在の老人、子供
8月6日を命日にもつ全ヒロシマの 市民群衆そして警官、
押し合い 怒号
とろうとする平和のビラ 奪われまいとする反戦ビラ 鋭いアピール！

電車が止る ゴーストストップが崩れる
ジープがころがりこむ 消防自動車のサイレンがはためき
二台 三台 武装警官のトラックがのりつける
私服警官の堵列[とれつ]するなかを 外国の高級車が侵入し
デパートの出入口はけわしい検問所とかわる

だがやっぱりビラがおちる
ゆっくりと ゆっくりと
底[ひさし]にかかったビラは箒をもった手が現れて 丁寧にはき落し
一枚一枚 生きもののよう 声のない叫びのよう
ひらり ひらりと まいおちる

鳩を放ち鐘を鳴らして 市長が平和メッセージを風に流した平和祭は
線香花火のように踏み消され 講演会、音楽会、ユネスコ集会、
すべての集りが禁止され 武装と私服の警官に占領されたヒロシマ、

ロケット砲の爆煙が 映画館のスクリーンから立ちのぼり
裏町から 子供もまじえた原爆反対署名の 呼び声が反射する
1950年の8月6日の広島のを 市民の不安に光を撒き
墓地の沈黙に影を映しながら、
平和を愛するあなたの方へ 平和をねがうわたしの方へ
警官をかけよらせながら、 ビラは降る ビラはふる

(峠三吉は最も有名な原爆詩人。『原爆詩集』はプレスコード下の1951年に自費出版された)

<核をつくった人々>

ヒバクシャの「人間の物語」とともに、少し核を開発した側の「人間の物語」についても触れたいと思います。

原爆の開発は、米ロスアラモス国立研究所を中心に、マンハッタン計画という名前で進められました。科学者・技術者がかき集められ、初代所長はのちに原爆の父と呼ばれるオッペンハイマーがつけました。彼はカリフォルニアで教授として先駆的なブラックホール研究をしていた人物でした。

オッペンハイマーは、「世界に使うことのできない兵器を見せて戦争を無意味にしよう」（核抑止）と考え、核開発に携わりながらも実際の核使用には反対していましたが、実際にヒロシマ・ナガサキに原爆が落とされ絶望。「科学者（物理学者）は罪を知った」と戦後語ったと言います。その後は水爆開発を中心に核に反対。そのためにレッド・パージにあい生涯をFBIに監視される生活だったと言います。能力や良心だけでは戦争・悲劇は止められないことを表す象徴的人格だと言います。

ヒロシマ・ナガサキに落とされた核の濃縮作業を担っていたのは、実は大学を出たばかりの女性たちでした。高賃金・娯楽施設まで完備されている一方、作業内容は一切知らされず、違反すれば厳罰が加えられる、「見ざる・言わざる・聞かざる」を徹底されたオークリッジという「秘密都市」で濃縮作業が進められました。彼女たちが何をさせられていたかは終戦後だと言います。戦争を終わらせたのはあなたたちの頑張りがあったからだと。

広島・長崎に原爆が落とされたのは、三菱重工を中心としたの軍事工場を破壊するためでした。戦争は兵隊だけでできるわけではなく、総力戦、人間や生産力を戦争に傾注することで可能になります。広島で被爆した動員学徒たちの多くは、三菱重工の工場朝早くから作業している中で被爆しました。



武器も核兵器も人間の労働の産物です。何のために人間の能力を発揮するのかの問題、そして、人間の能力がカネや暴力といった強制力によって、どのように使われてしまうのかの問題です。戦争が象徴的なだけであって、カネや暴

力で個々人の意志を押しつぶし、支配する在り方は日常不断にあることです。ヒロシマの碑、「過ちは繰り返さない」の誓いは、このカネや暴力で人間が人間を支配する在り方を終わらせることによってこそ、達成されるのではないのでしょうか。

現在は朝鮮戦争に向かおうとしている情勢のなか、戦争放棄・軍隊の不保持をうたった憲法9条を変え、自衛隊を合憲化する内容で改憲が進められようとしています。アメリカでもトランプ政権がNPR（核態勢見直し）で核使用を積極的に提起しました。再びの核戦争の危機です。

これまで核戦争を阻んできたのは、ヒロシマ・ナガサキのヒバクシャを中心とした「二度と繰り返させない」という強い思いでした。今こそ、反戦反核のヒロシマを再びとらえ返してもらえたらと思います。

